

2022年07月10日

追悼：湯川順夫さん「民族問題の歴史からウクライナ問題を考える」

(2022年6月28日絶筆)

アジア連帯講座で何度も講演されてきた湯川順夫さんが闘病の末に、2022年7月6日に亡くなった。79歳。

7月8日と9日の通夜と葬儀には三鷹地域で続けてきた野宿者支援運動「びよんどネット」(21年解散)、「トロツキー研究所」(19年解散)の仲間など大勢が集まり、湯川さんを送った。以下は、お通夜のときに、お連れあいさんから頂いた湯川さんの絶筆「民族問題の歴史からウクライナ問題を考える」。

お連れ合いさんによると、入院前日の6月28日まで、苦痛にたえながら病床の上で、毎日数行ずつ書いてきたという。原稿は途中で終わっている。写真は2022年3月21日に東京・代々木公園でおこなわれた「ウクライナに平和を！原発に手を出すな！3.21市民アクション」に参加した際のもの。スターリンのウクライナ、グルジア自決権はく奪に抗したレーニンの最後の闘争と同じく、湯川順夫さん最後の闘争だった。遺志を引き継ぎ、世界の仲間たちとともに新しい時代を切り開こう。(H)



湯川順夫：民族問題の歴史からウクライナ問題を考える(2022年6月)

(誤記等は*印で修正・補足した：ブログ管理者)

A——当面の中心的で本質的な問題は、まず何よりもロシア・プーチンの大ロシア民族排外主義政権によるウクライナ軍事侵略を阻止すべきだ。なぜなら、今回の侵略は、ウクライナに対するロシア排外主義によるあからさまな、民族抑圧、軍事的占領、直接的なその軍事侵略そのものであり、それ以外の何物でもないからだ。従って、私たちの議論、取り組みは、まず何よりも、以上の立場から出発しなければならない。

B——でもプーチン政権をそうせざるを得ない立場に追いやったのは、NATOを初めとした日本をも含む欧米日の西側大国ではないのか？

A——ということは、あなたは、ロシアのプーチン体制が圧倒的軍事的優位を背景に、ウクライナを全面的に軍事侵略して、それを支配しようとしているのに、悪いのは主として西側大国だと言いたいのだろうか？ 西側大国の責任非難することだけで、済ましてそれで終わりだということだろうか？ この事態に当面何をすべきなのか？

B――いや、それは……。そうは言っていない。でも、これは結局、西側と東側の両大国間の対立ということなのでは？

A――問題を戦略的に考えなければならない。

B――「戦略的」とは、上から目線だね！

C――戦略的とは上から目線などということではなく、全体的な今日の情勢を考えて、まず何に集中的に取り組むべきかを考えるべきだ、ということだ。当面集中すべきは、まず何よりもプーチンの政権の軍事侵略を阻止し、それを挫折、ロシア軍のウクライナからの撤退を勝ち取ることであり、これをウクライナの民衆とロシア国内の戦争に反対する勢力、全世界の民衆の力を結集して、この点を勝ち取ることだ。

その点を明確にせず、欧米日の西側大国に責任があるというだけしか言わないのは、それは当面、何に集中して闘うべきか、その焦点を曖昧にすることになるだろう。

B――でもそれでは、ウクライナの「ネオナチ勢力と一緒にロシアと闘うことになるのでは？ それでよいのか？

A――極右勢力がウクライナ国内で一定の勢力を保持しているのはその通りだ。隣国の大国ロシアがウクライナはロシアのものだとして軍事侵略をして来ている状況のもとで、極右が一定の勢力をもつことは、ある程度、想定される。

だが、ロシア軍の無差別攻撃によって、殺害され、家を破壊され、避難したり、故郷を迫られて国外に逃れたりしている圧倒的多数の人々はネオナチの人々なのだろうか？ このように考え、宣伝しているのはプーチン政権の側であって、現実には、こうした苦難に遭遇しているウクライナの人々の圧倒的多数は、ネオナチではなくて、大国ロシアの圧倒的な軍事侵略を前にして、ウクライナ民族主義の立場を取らざるえなくなっているということなのだ。ネオナチとウクライナ民族主義とは区別しなければならない。圧倒的に強大な力をもつ大国の不当な力による軍事侵略を前にして、人々は時として民族主義に自分たちの怒りの表現のよりどころを求める。

「ル・モンド」紙(2022年3月)によれば、ネオナチだと非難されているアソフ大隊は、ウクライナ軍全体の2%未満の割合を占めているにすぎない、という。

同じく国政選挙でも同紙は、ネオナチと言われている政治勢力がきわめて弱体であると指摘している。そのうちの二つの政治勢力のうち的一方である、プロヴィイとセクトルの二党合わせた候補者の得票率は3%未満であり、すなわち、スポボダの候補者のオレグ・ティアグニボクが1.8%、プラヴィイ・とセクトルの党首、ドウミジ・ヤロシュが0.9%であった。同紙は、要するにこれらの勢力は反ユダヤ主義とは何の関係もないとしている。これが、ウクライナの極右勢力の現在の実態なのだ。

B――でも、それはネオファシストと一緒に反ロシアで闘うことを意味しないだろうか？

(*A――)きわめて大規模な反原発運動が存在しています。大衆鉄器(*「的」の誤り?)であるがゆえに、この運動には保守派をも含めて実に多様な政治潮流が登場します。でも、人々は、その中に保守派がすこしだけ参加しているからと言ってそれについていちいち目くじらをたててはいません。そうした保守派が参加しても、それはごく少数であって、反原発運動(*「動」の誤り?)全体の性格に影響を及ぼすことなどないということなどはないと十分承知しているからです。

同じことは、フランスの「黄色いベストの運動」についても言えます。この運動は、きわめて大規模で長期にわたって持続した重要な全国運動になりました、Bさんは、口に出しては言わなかったのですが、当初、この運動に批判的だったのではないだろうか？トラック輸送業者が極右勢力と結託して、運動を代表しようと試みました。しかし、こうした姑息な試みはすぐさま運動地震（*「自身」の誤り？）から排除されてしまいました。デモに参加していた極右派の隊列も、CGTやNPAに対する武装襲撃を試みて、排除されていきました。フランスの社会運動は、この運動の中で地区から代表を選出する全国会議を何度か開催する努力を続けました、これは、これまで既存の労組や政党と関わったことはなく。

そうした官僚機構に強い不信感を抱いていた運動参加者にとっては、容易に応じることができるものではなかった。しかし、この運動は、こうした社会運動の地道な努力によって、いくつかの地域で、社会党・共産党の左の立場に立つ地域の社会運（*「動」が抜けている？）の共闘の結成へとつながり、それらを通じていくつかの地で地方議会の議員を当選させるに至りました、わずかな成敗（*「成功」の誤り？）ですが、極右派の介入を危惧するのではなく、社会運動の地道な活動によって、それを克服できるのだ、ということはこのことは物語っていないだろうか？

C——この戦争は結局、両大国間（欧米日）ロシア（中国）という2大国陣営の対立・戦争ということになるだろう。

A——そこだけを取り出せば、それ事態間違っていない、でもそれでは余りにも抽象的で、第一大戦以降にも当てはまり、具体性に欠け、何も言っていないことになるだろう。

こうした大規模な戦争では、ひとつの形だけではなく、さまざまな形態が複合的に結びついている。

Cさんが問題しているてん（*「点」か？）を、エルンエスト・マンデルは、次のように説明している。今回のロシアの侵略のような大規模な戦争はいくつかの形の複合的組み合わせとして展開される、と。

たとえば、第二次世界大戦の全体的な性格は次の5つの異なる戦争の組み合わせだ。

①帝国主義相互間の世界的ヘゲモニーを目指す戦争（米英仏など 対 日独伊）。アメリカがこれに勝利を収めた—Cさんの指摘している側面

②ソヴィエト連邦を破壊植民地化して、1917年のその成果を破壊しようとする帝国主義の試みに対する、ソ連による正義の自衛戦争

③にほん帝国主義に対する中国人民のさまざまな軍事大国に対する中国人民の正義の戦争

④さまざまな軍事大国に対するアジア、インドシナを含むアジア人民の正義の戦争

⑤ヨーロッパの被占領地域の民衆よって民族解放の正義の戦争（ユーゴスラビア、ギリシャ、フランスイタリヤなどのレジスタンス）。

この5つの戦争の密接不可分の関係に関係しているので、①の戦争の携帯（*「形態」の誤りか？）も民衆の戦い（②、③、④、⑤の形態を内包していた、とマンデルは主張しているのです。この要素を彼は「正義」の戦争と表現している。そこには、旧ソ連邦の赤軍だけでなく、労働者、抑圧を受けている人々、大地主の下で搾取・収奪されている人々、女性をはじめとする、いわれないさまざまな差別を受けている人々がそれに参加していたのだ。

C——えつ、、、ソ連の官僚体制を評価するのですか？

A——でも、①の戦争は②、③、④、⑤のような民衆の闘いと不可分に結びついていたのではないのか？

この視点を見ないと、今日の「歴史修正主義」の歴史的総括、「レジスタンスもナチも暴力の行使という意味では、同列だ」とする歴史的評価が台頭してきている。エンツォ・トラヴェルソの批判的を射ている。だから、抽象的何にしよせんは、大国間の争いにすぎないと曾長的（*「抽象的」の誤りか？）に言うべきではないのだ、という「歴史修正主義」的な歴史総括となってしまうだろう。

冷戦が終結したアメリカのブッシュ大統領の統治時代に人々は大きな期待を抱いた。第二次世界いわゆる「国際社会」を根本的に改善できる時代が到来したのだという大きな期待だ。

エンツォ・トラヴェルソ『ポピュリズムとファシズム』（『作品社』）

A — このようにして戦われた第二世界大戦後の世界がどうあるべきか、ロシア革命の専門家であるE・H・カーは、つぎのように語っている。

「新しい国際秩序新しい国際調和というものは、寛容なおかつ圧政的でないものとして、あるいは……実行可能な他のどんな選択肢よりもものぞましいものとして、それぞれ一般に受け入れられる支配を基礎にして切めて築かる。支配下の領土に対するドイツないし日本による、事実、イギリスやアメリカの場合の方が大きな要素となっている」

「不平等を緩和して紛争を解決するため、経済的利益は犠牲にされなければならない」。

以上の国際的枠組みは、われわれの社会運動にとってまったく不十分なものだが——社会主義やスターリニズムの指導部の抑圧、弾圧の結果として——、第二次世界大戦後の世界そのものであった。国連、IMF、人権、福祉制度、人権、平等など（*テキストはここで途絶えている）

A — これについて冷戦終結がさらにここから質的に前進する機会が訪れ、冷戦時代の莫大な核・大量破壊兵器軍拡の決定的な削減、その費用を世界の貧困、地球環境の決定的な費用に振り向けることが可能となった、これは、ロシアや中国にとっても基本的に受け入れられるものだっただろう。そして、こうして軍拡に使われてきた膨大な予算、ロシア・東（*「欧」が抜けている？）官僚体制の再生に振り向けることが可能だっただろう。

ところが、ブッシュ政権はそれとは正反対の方向へと走ったのだ。

自国経済を優先し、EUに支援を求めるロシア（*「ロシア」の誤り？）東欧体制に対しては、IMFのかの悪名高き「構造調整」を求めるだけだった。

経済についても、自国経済を優先し、「貿易戦争」に走った。そればかりでなく、アメリカが単独で世界の覇権を握るチャンスとばかり、「国連」すら無視し、イラク、アフガニスタンへの軍事侵略、占領にのめりこんでいった。

まさに、今、ロシアのプーチンやっていることことにほかならない。当然、このアメリカの軍事的侵略は、見事破産した。

ジルベール・アシュカル『野蛮の衝突』

A — 以上の点を、欧米日の側の責任として指摘するCの主張は正しい

でも、再度繰り返すが、大国ロシアが大規模な軍事斟酌を展開しているこの時点で、その点触れず、プーチン政権の侵略に触れないのは、間違っている。

C — でも、ウクライナのネオファシストと一緒にかつどうするのはどうなのか？それで、国際労働者救援輸送隊の運動がある。今はヨーロッパへの送金は不可能なので これであれば、直接、ウクライナの労働者へ救援物資を渡すことができらう。

C — ところで、ウクライナなどの東欧はどうしてヨーロッパの穀倉地帯になったのだろう、

A—それは大航海時代の世界の一体化の時代にさかのぼる。

西ヨーロッパの中世の古典的荘園では、封建領主＝農奴の力環形（*「力関係」の誤り？）は次第に農奴に有利になりつつあり、地代は、賦役→物納→貨幣地代へと変わっていた。こうした中で、世界の一体化によって、南米のポトシ銀山の、日本の銀がヨーロッパに大量に流入し、「価格革命」がおり、農奴の力がさらにつよまり、その中から自立した市民層も形成されていく。覇権は、古代地中海から、ヨーロッパの大西洋岸に移り、アムステルダムに移行した。他方、東欧ではそれと逆行する事態が進行した。封建貴族が農奴への締め付けを強化するという逆行が生じ＝「再販農奴制」。こうして、東欧の支配層は農奴制の強化に基づいて、「資本主義的な」取引に基づいて穀物を西ヨーロッパに輸出するが関係が成立する、
中心 対 周辺 西ヨーロッパ 対 東欧
オーデルナイセ川を境に、東欧の西半分は、オーストリア・ハンガリー帝国、東半分は帝国」の支配下に、
（*テキストはここで途絶えている）

追悼 湯川順夫同志 湯川さんの思い出（関西時代と国際部時代）

2022年7月20日 喜多幡 佳秀

トロツキー研究所、ポーランド資料センター、ATTACジャパンそして地域のホームレスの人びとへの支援運動などで活動していた湯川順夫同志がさる7月6日にガンで亡くなった。享年79歳。7月9日に三鷹市のやすらぎ市民斎場で葬儀が行われた。湯川同志は、京都大学時代に第四インターナショナルの運動に参加し、1960年代後半のラディカルな青年・学生運動を担うと共に関西地方委員会の指導部として闘った。湯川同志はその後、上京して第四インターナショナル日本支部の国際活動の中心を担った。湯川同志はマンデルやベンサイド、アシュカルなどたくさんの翻訳を行い、その時々問題になっている本を紹介した。トロツキー研究所では事務局長を担い、「トロツキー研究」の発行に尽力した。そして、三鷹の夜回り「びよんど」の代表を担い、野宿者支援を精力的に行った。次号に東京での活動の様子を伝える追悼文と死ぬ間際まで書いたウクライナ連帯についての文章や翻訳した文章を掲載する予定。（編集部）

7月6日に湯川順夫さんが亡くなったことを友人から聞いた。癌で闘病されていたことは聞いていたし、かなり危ないことも知らされていたが、見舞いに行くこともできないままだった。

湯川さんとの付き合いは私が大学に入学した1968年以来で、1978—83年には第4インター日本支部（当時）の国際部の活動で日常的に議論していた。私が関西に戻ってからは会う機会も少なくなったが、湯川さんの精力的な翻訳活動には驚嘆していた。トロツキー研究所の事務局長としての業績や地域でのホームレス支援の活動については頭が下がる。

私が社青同国際主義派（JRCLの学生組織）に加盟したころ、湯川さんは大学院に進んでいて、それほど頻繁に会ったわけでもなく、学究肌で、超然とした印象だった。あとで先輩たちの話を聞いて、学部時代は「社学同レフト」（JRCLのフラクション）で、同学会（全学自治会）でも活躍していたことを知り、意外だった。そういえば後年も、論争になった時にはその当時の党派間の論争を思い出させるようなロジックや修辞を多用していた気がする。

湯川さんと日常的に顔を合わせるようになったのは1970—71年ごろからで、JRCL関西地方委員会での「急進主義派」（学生）と「反急進主義派」（旧指導部）の主導権争いに決着がつき、旧指導部が退き、中間的な立場にいた湯川さんが関西地方委員会の議長に就任し、私も事情がわからないまま関西書記局に加わるようになってからである。学究肌で、超然とした印象はその時期にも変わることがなく、寸暇を惜しんで経済学や西洋思想、ソ連・東欧に関する文献を熱心に読

んでいたのを覚えている。それでもこちらから話しかけると必ず相手をしてくれ、真面目な顔で冗談を言ったりしていた。今から思えば、当時の読書はそのままその後のライフワークになっていたのだろう。急進主義的な気分が抜けない私は、湯川さんのそんな超然とした活動姿勢に苛立って、いろいろと失礼な言動を繰り返したことを覚えている。ちなみに湯川さんの「中間的な立場」は、今から思えばその当時だけではなく、その後も一貫していたのかもしれない。両極端を排するという点では、動揺する中間主義ではなくブレない中間主義、そんなスタンスがあってもいいと納得してしまう。

ある日、私が事務所の電話番をしていた時に、湯川さんのご家族から電話がかかってきた。聞くともなく聞いていると、湯川さんは「もういいです」と言って電話を切った。どうやらご家族からは大学院の卒業の見通しについて迫られていたようで、湯川さんにとっては学究生活への道をあきらめる「人生の一大決断」だったのだろう。

湯川さんは1976年に国際部の専従として東京に移住。クセのある我儘なスタッフを束ね、いつも両手に大きなカバンを持って、時間があればどこでもコツコツと原稿用紙を埋めていた。時には気分転換に事務所に近い公園でキャッチボールをしていたが、あの温厚そうな表情に似合わない豪球を投げかけてくるので恐かったこともある。

国際部当時、湯川さんから「娘が熱を出したので、今日の会議は欠席させてほしい」という連絡を受けたことが何度もある。「またか」と思ったこともあるが、後年、私も娘の病気で予定をキャンセルすることが続いていた時、「俺のところもそうだったよ」という湯川さんの一言に救われたこともある。

1983年に、私が専従をやめて大阪に戻るつもりであることを湯川さんに伝えた時は、「俺も専従をやめるつもりだったのに」と動揺していた。当時、先に専従体制を抜けて事業活動を始めていた先輩の世話で翻訳の仕事が確保できたので、いっしょにその仕事をしながら活動を継続しようということで、私の計画を認めてもらった。とはいえ技術翻訳に必要な知識も経験もない私たちは、辞書と想像力と度胸を頼りになんとか生計を維持した(トンデモ訳で顧客に迷惑をかけたことも多々あるだろうがもう時効である)。

そうこうするうちに、湯川さんは「本来の」活動の領域を広げていった。それについては他の同志による追悼文に詳しいし、その中には私の知らなかったことも多い。

湯川さんの逝去を伝える私のフェースブック投稿に元メンバーたちもコメントしてくれている。多くは1970—80年代に共青同の中心を担った人たちだ。湯川さんが若い人たちに慕われていたことがわかる。若い人たちを相手にトロツキーの理論や世界情勢についてうれしそうに話していた顔が今でも思い浮かぶ。

やり残したことも多いでしょうが、永年、ごくろうさまでした。心からご冥福をお祈りします。